

常盤仲之町遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告

二〇〇九―一八

常盤仲之町遺跡

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

常盤仲之町遺跡

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、道路拡幅工事に伴う常盤仲之町遺跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

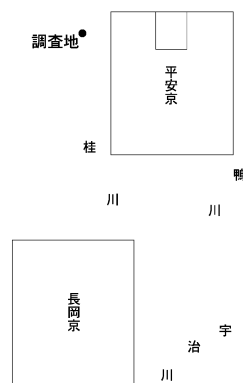
平成 22 年 4 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 常盤仲之町遺跡
- 2 調査所在地 京都市右京区太秦東蜂岡町地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2009年12月14日～2010年2月2日
- 5 調査面積 210 m²
- 6 調査担当者 辻 裕司・東 洋一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「鳴滝」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 辻 裕司・東 洋一
- 14 執筆分担 辻 裕司：1・3～5、東 洋一：2
- 15 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
3. 遺 構	6
(1) 基本層序	6
(2) 第2面の遺構	6
(3) 第1面の遺構	10
4. 遺 物	14
(1) 遺物の概要	14
(2) 土器類	14
(3) 瓦類	16
5. ま と め	17

図 版 目 次

図版1 遺構	1 調査区全景（北から）
	2 溝5（北から）
	3 溝10（北西から）
図版2 遺構	1 竪穴200（北から）
	2 井戸1埋戻し状況（北から）
	3 井戸1断割（西から）
図版3 遺構	1 建物1 柱穴26（北から）
	2 建物1 柱穴27（東から）
	3 建物2 柱穴36（南から）
	4 建物2 柱穴63（西から）
	5 柵1 柱穴17（東から）
	6 柵1 柱穴23（東から）
	7 柵2 柱穴66（南から）
	8 柵2 柱穴136（南から）
図版4 遺物	井戸1出土土器

挿 図 目 次

図1	調査前全景	1
図2	作業風景	1
図3	調査区配置図（1：500）	2
図4	周辺調査位置図（1：5,000）	4
図5	調査区南壁・西壁断面図（1：80）	7
図6	調査区平面図（1：100）	8
図7	竪穴200実測図（1：50）	9
図8	建物1～3実測図（1：80）	11
図9	建物4、柵1・2実測図（1：80）	12
図10	溝5・10断面図（1：40）	12
図11	井戸1実測図（1：80）	13
図12	土坑208・井戸1出土土器実測図（1：4）	15
図13	井戸1出土瓦拓影・実測図（1：4）	16
図14	井戸1出土瓦	16

表 目 次

表1	周辺の調査一覧表	5
表2	遺構概要表	6
表3	遺物概要表	14

常盤仲之町遺跡

1. 調査経過

本調査は、梅津太秦線限度額立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務（その2）である。この発掘調査は、京都市建設局事業推進室から委託を受け、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「市文化財保護課」という。）の指導の下、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。調査地点は、京都市右京区太秦東蜂岡町地内に所在する。東映太秦映画村の敷地東端から城北街道西端間の幅約20mの道路拡幅予定地であり、上記契機による2008年度調査地点（図4-27）から約55m南に位置する。北接して2009年度1区調査地点（図4-28）がある。

調査地点は、常盤仲之町遺跡の南東部に該当する。常盤仲之町遺跡は、古墳時代中期から江戸時代にかけての遺構が重複する遺跡として周知され、周辺の調査では当該期の遺構が多数検出されている。調査地点の北側には平安京と嵯峨野を結ぶ古道である嵯峨街道が東南東―西北西方向に延長し、東接して城北街道がやや西に振れながら南北方向に延長する。また、調査地点は太秦広隆寺の北東に位置する。広隆寺の寺域は未確定であるが、北限ならびに東限は調査地点の北側ならびに西側に近接して想定されている。

今回の調査では、常盤仲之町遺跡および広隆寺旧境内に関連する遺構の検出を主目的とした。

調査区は、東西約17m、南北約14mの範囲に設定した。調査面積は、調査区南西隅に東映太秦映画村の避難通路を確保などの条件による必要性から除外したことにより、約210㎡となった。機械掘削による排土は、場外に搬出し仮置きした。機械掘削に伴い発生した既存配水管などのコンクリート構造物および既存駐車場のアスファルト、金属類などは、分別し産業廃棄物として処分した。調査終了後は、仮置き土を用いて埋め戻した。

なお、市文化財保護課の指導は、調査区設定時の2009年12月14日と、調査の進展に伴い2010年1月6日・1月14日・1月26日に受けた。また、当研究所の調査指導委員からは、1月13日に鈴木久男教授（京都産業大学）、1月26日に高正龍教授（立命館大学）により指導を受けた。



図1 調査前全景



図2 作業風景

2. 位置と環境

調査地点は、古墳時代中期から江戸時代にかけての遺構が重複するとされる常盤仲之町遺跡に位置する。常盤仲之町遺跡は、御室川などによって形成されたと考えられる洪積台地と、桂川の

氾濫原や後背湿地である平地までの南に下がる緩傾斜面にほぼ該当する。

調査地点の北側に近接して、東南東-西北西方向に嵯峨街道が延長している。この嵯峨街道は、旧行政区画である常盤村と太秦村の村界を貫通しており、平安京と嵯峨野を結ぶ古道として平安時代には成立していたと考えられる。

一方、調査地点の東に沿って城北街道が南北方向に延長するが、この街道が何時から成立したのかは不明である。近世は常盤村が仁和寺領であったのに対し、太秦村の多くは広隆寺領であった。なお、明治時代に陸軍によって作成された「陸地測量図」によれば調査地点は藪と記載されている。

常盤地区は、平安京に隣接する郊外として、平安時代から歌枕の「常盤里・常盤杜・常盤山」として多くの歌に詠まれており、平安時代前期には嵯峨天皇皇子の源常の別業が営まれた。また、平安時代末から鎌倉時代にかけては、八条女院をはじめ貴族の領地もしくは別業を御堂として造営することが盛んであった地域である。しかし、平安時代中期に関しては不明な点が多い。

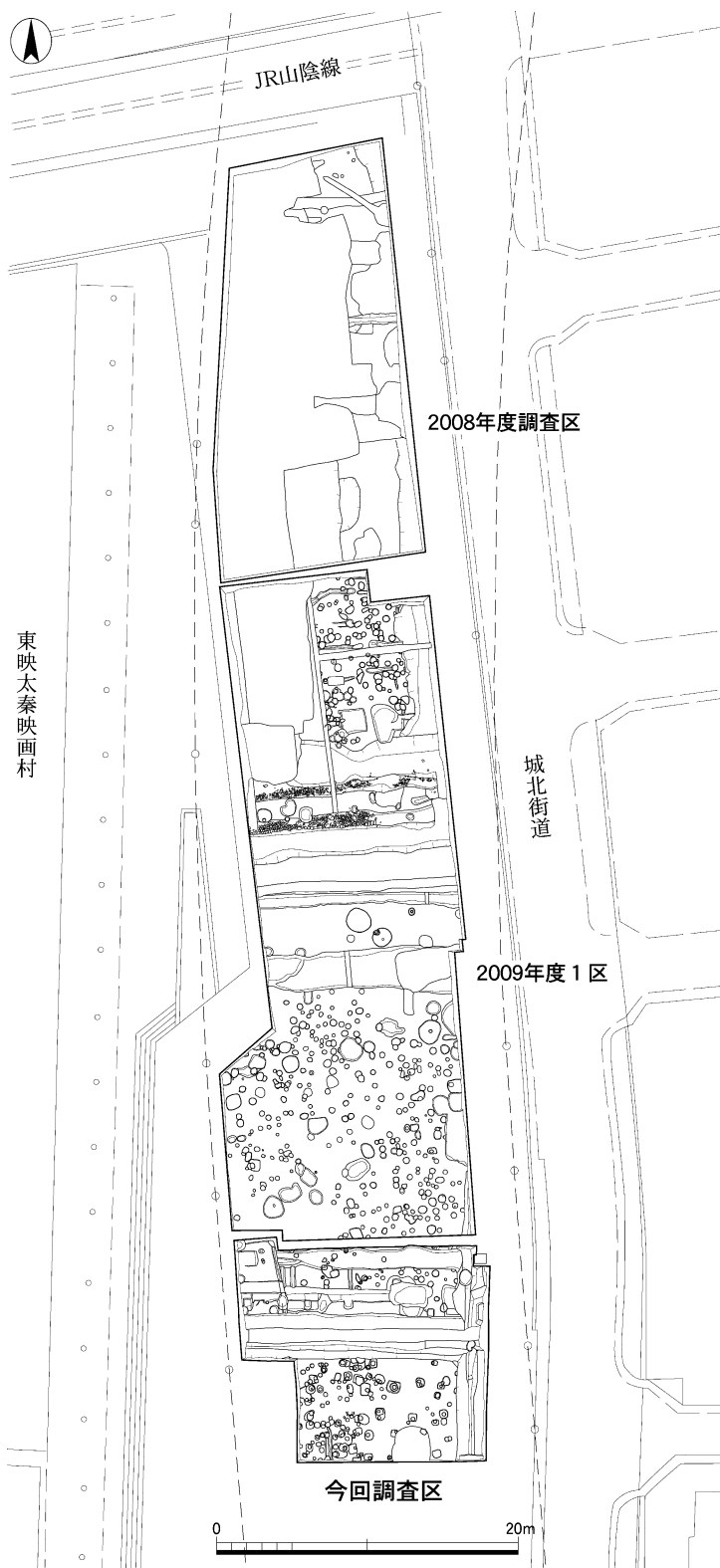


図3 調査区配置図 (1:500)

太秦地区は、文字通り秦氏の根拠地として知られ、飛鳥時代に秦川勝が建立したとされる太秦広隆寺が現存する。広隆寺は鎌倉時代後半に広隆寺桂宮院を拠点に、葬送儀礼の庶民への普及と太子信仰・仏舎利信仰によって教線を拡大した西大寺律宗真言僧澄禪が勧進上人として再興したことが知られている。また、調査地点の南西方向には、平安時代後期の弁天島経塚が存在したが、今日では消滅している。

常盤仲之町遺跡では、古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居跡・掘立柱建物などが台地上や傾斜面から多数検出されており、当該期の集落が存在したことが窺われる。また、遺跡東部の1976年度調査(図4-5)では、鎌倉時代から江戸時代にかけての土壙墓が60基以上検出されており、遺跡北東部一帯が中世の墓域であったことを窺わせる。2006年度調査(図4-23)でも、室町時代後半の火葬場を示すと考えられる石組の施設と火葬墓が検出されている。

『京都市遺跡地図台帳¹⁾』によれば、今回の調査地点は、広隆寺旧境内に東接する。広隆寺旧境内は、常盤仲之町遺跡の南半の大部分と重複するが、広隆寺旧境内の範囲は不明な点が多く、今日までの調査で確定できているわけではない。今回の調査地点北側に位置する2008年度調査(図4-27)も広隆寺旧境内に東接する地点の調査である。この調査では、現城北街道に沿って中世の遺物を包含する幅2m以上の南北方向を示す溝が検出されている。また、奈良時代から中世にかけての瓦も多数出土しており、広隆寺旧境内の東限がさらに東へ広がる可能性が窺われる資料である。

当該地を含む嵯峨野地域の条里復元は文献史学と地理学によって進められてきたが、それらによれば広隆寺は葛野郡五条荒蒔里に該当するとされる。2008年度調査(図4-27)で検出された現城北街道に沿う南北溝が、五条荒蒔里東限の可能性もあり、嵯峨野条里復元と広隆寺東限の定点をなすものとなる可能性がある。

なお、当該地周辺の地理・歴史的環境や遺跡調査概要については、昨年度の発掘調査報告書に詳述されており、当該報告書を参照されたい。²⁾ 周辺の遺跡調査成果については、表1に概要をまとめた。

註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局 2007年
- 2) 『常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-20 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-21 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年 など

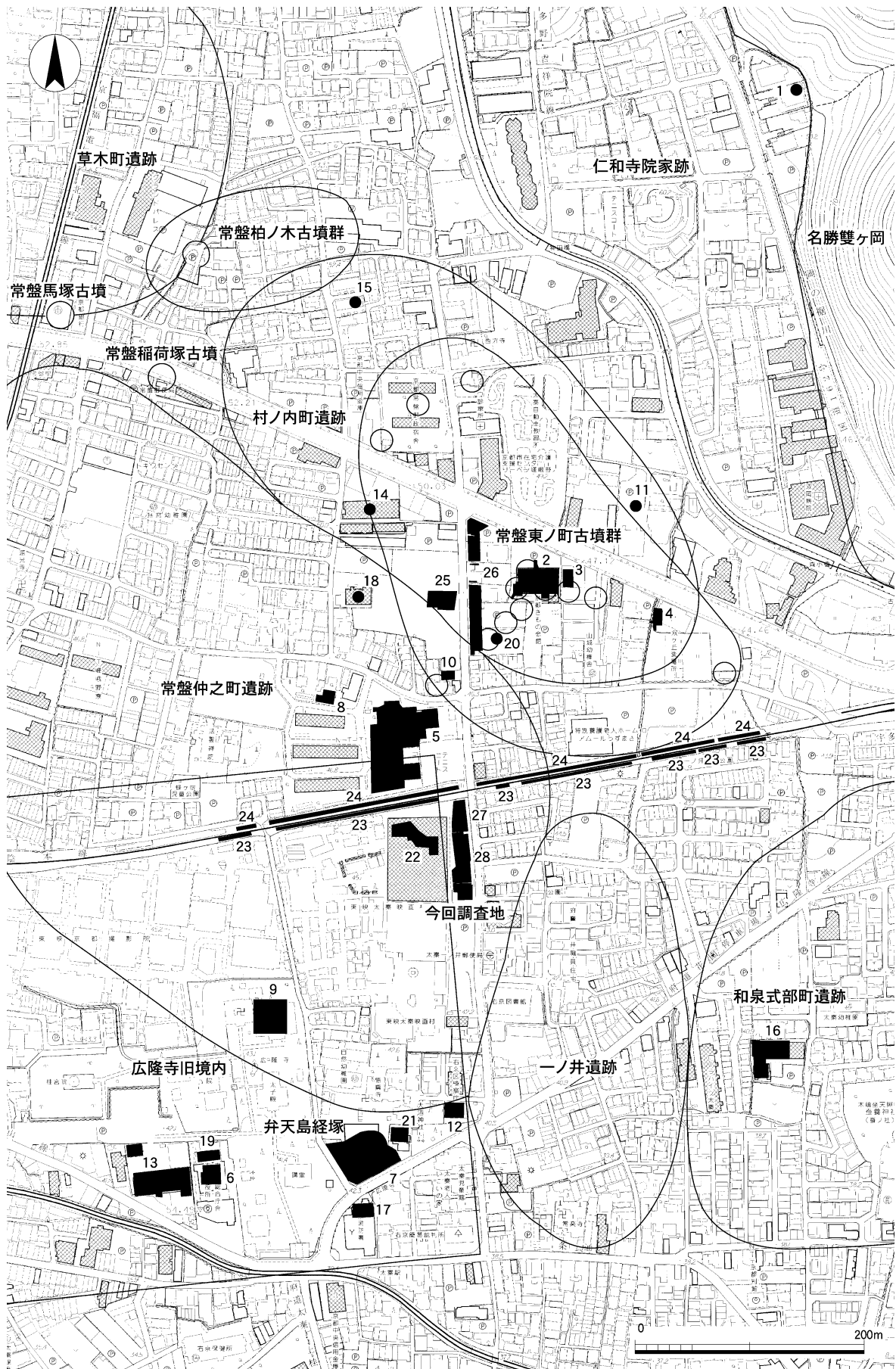


図4 周辺調査位置図 (1 : 5,000)

表1 周辺の調査一覧表

No.	調査年度	方法	調査日	調査概要	文献
1	1974	発掘	1974.11.01～ 1975.01.15	室町頃の土師器皿の出土する窯	『平安建設株式会社所有の双が岡西麓地に於ける埋蔵文化財発掘調査概要』『埋蔵文化財発掘調査概報集』鳥羽離宮跡調査研究所 1976年
2	1976	発掘	1976.10.26～ 1976.12.06	古墳後期の円墳3、室町～江戸の土壇墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-I (財)京都市埋蔵文化財研究所 1977年
3	1976	発掘	1976.11.03～ 1976.11.15	古墳後期の円墳1、室町～江戸の土壇墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
4	1976	発掘	1976.11.24～ 1976.12.07	平安の柱穴群・土坑2、弥生～古墳の包含層、弥生土器・須恵器	『仁和寺子院跡』『京都市埋蔵文化財研究所概報集1979-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
5	1976	発掘	1977.02.01～ 1977.06.10	古墳後期の竪穴住居24・建物4・溝、平安の建物4他	『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
6	1977	発掘	1977.05.03～ 1977.06.12	飛鳥の基壇、奈良～平安の建物、瓦・須恵器・土師器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
7	1977	発掘	1977.11.11～ 1978.02.11	平安後期の経塚群、土師器・須恵器・白磁・軒瓦・金属製品・石製品他	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
8	1977	発掘	1978.01.30～ 1978.02.18	室町の柱穴・土坑	『日本電信電話公社嵯峨野住宅集会所新築に伴う発掘調査』『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告III (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年
9	1979	発掘	1980.02.01～ 1980.03.31	古墳後期の竪穴住居、平安・鎌倉・室町の土坑、土師器・須恵器・輸入陶磁器・陶器・磁器・植輪	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
10	1979	発掘	1980.02.27～ 1980.03.15	古墳周溝、鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・瓦器・陶器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
11	1980	立会	1980.05.22	弥生の包含層、弥生土器	『調査概要一覧表』『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度 京都市文化観光局 1981年
12	1980	発掘	1980.10.20～ 1980.11.24	古墳後期の竪穴住居、平安中期の建物・柵・柱穴	『広隆寺跡-右京検察庁庁舎改築に伴う発掘調査の概要-』昭和55年度 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1981年
13	1981	発掘	1981.07.13～ 1982.03.12	飛鳥の土坑、平安時代の梵鐘製造遺構	『広隆寺跡』『京都府遺跡調査概報』第5冊-2 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982年
14	1982	試掘	1982.08.09～ 1982.08.10	古墳後期～室町の土坑・包含層、土師器・白磁	『調査概要一覧表』『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
15	1986	試掘立会	1986.11.21～ 1987.04.03	弥生中期の土坑・流路・包含層、土師器・陶器・瓦	『調査一覧表 太秦地区』『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
16	1987	発掘	1987.05.06～ 1987.07.31	弥生中期の竪穴住居、古墳前期の竪穴住居・土師器、古墳中期の須恵器	『和泉式部町遺跡』『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
17	1990	発掘	1991.03.19～ 1991.04.20	飛鳥の溝・柱穴・土坑、平安～室町の包含層	『広隆寺旧境内1』『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
18	1991	立会	1991.12.03～ 1991.12.05	平安前期の長方形土坑、須恵器	『調査一覧表 太秦地区』『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年
19	1991	発掘	1992.01.12～ 1992.02.22	平安前期～中期の溝・土坑・柱穴、江戸の溝	『広隆寺旧境内2』『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
20	1992	試掘	1993.03.25	古墳の溝1、平安・鎌倉の土坑2、土師器・須恵器・銭	『常盤東ノ町古墳群』『京都市内遺跡試掘調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994年
21	1993	発掘	1993.04.17～ 1993.05.31	飛鳥の竪穴住居・土坑、平安中期の溝・柱穴	『広隆寺旧境内』『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
22	1995	発掘	1996.01.11～ 1996.04.13	飛鳥の竪穴住居4、平安～江戸の遺構	関西文化財調査会による発掘調査実績報告
23	2006	発掘	2006.01.20～ 2006.07.20	弥生の竪穴住居、古墳～飛鳥の竪穴住居、鎌倉の土壇墓・溝・柱列	『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
24	2008	発掘	2008.04.11～ 2008.06.27	弥生の竪穴住居、古墳後期～飛鳥の竪穴住居・溝ほか	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2008年
25	2008	発掘	2008.11.25～ 2009.01.14	古墳後期～飛鳥の竪穴住居ほか	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-17 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
26	2008	発掘	2008.11.10～ 2009.03.17	古墳後期～飛鳥の竪穴住居ほか	『常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-20 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
27	2008	発掘	2009.01.20～ 2009.03.19	奈良の掘立柱建物、鎌倉～室町の土坑・溝・落込ほか	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-21 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2009年
28	2009	発掘	2009.12.14～ 2010.03.12	飛鳥の竪穴住居、平安の区画施設・溝・土坑、鎌倉～室町の土坑など	『常盤仲之町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-16 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2010年

※ Noは図4の調査地点の数字と対応

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図5)

基本層序 調査区内の大半は、碎石敷設により基盤層上面まで削平を受けており、遺物包含層や整地土層は、調査区西端および北端で検出したに過ぎない。基本層序は、北西隅部、西隅部およびその他の地点では、後世の削平の度合いにより大きく異なる。北西隅部のごく一部に、調査区内で最も良好に遺存していた箇所がある。現地表からアスファルト舗装が厚さ約0.1 m、アスファルト舗装下は、近代と考えられる耕作土層が厚さ約0.15 m、近世と考えられる耕作土層が厚さ約0.1 m、中世と考えられる遺物包含層が厚さ0.2～0.3 mあり、基盤層となる。西隅部では、現地表からアスファルト舗装が厚さ約0.1 m、アスファルト舗装下は碎石が厚さ約0.6 mある。碎石下は、中世と考えられる遺物包含層が厚さ0.05～0.12 m、平安時代と考えられる整地土層が厚さ0.05～0.12 mあり、基盤層となる。その他の大半の区域は、碎石が基盤層まで達しており、その間には土層は全く堆積していない。

上記堆積土層のうち、遺物包含層は、耕作土層とも考えられる土層で、南半では径1～2 cmの小礫を含む暗褐色砂泥層 (図5-12) で、幾つかの小柱穴はこの土層の上面で検出している。北西端の遺物包含層は、炭や焼土を少量含む黒褐色砂泥 (図5-13) や灰黄褐色砂泥層 (図5-14) で、各土層とも出土遺物は細片で詳細は不明であるが、鎌倉時代と考えられる。整地土層は、炭を少量含むにぶい黄褐色砂泥層 (図5-28) である。出土遺物は細片で詳細は不明であるが、平安時代と考えられる。また、基盤層は、南半では黄褐色シルト層が堆積し、北半では径1～5 cmの小礫を含む明黄褐色シルト層ないしにぶい黄褐色シルトが堆積する。

遺構の大半は、基盤層上面で検出しているが、層位による区分では、基盤層および整地層上層で検出したものを第1面、飛鳥時代の遺構の検出面を第2面として概要を示す。

(2) 第2面の遺構

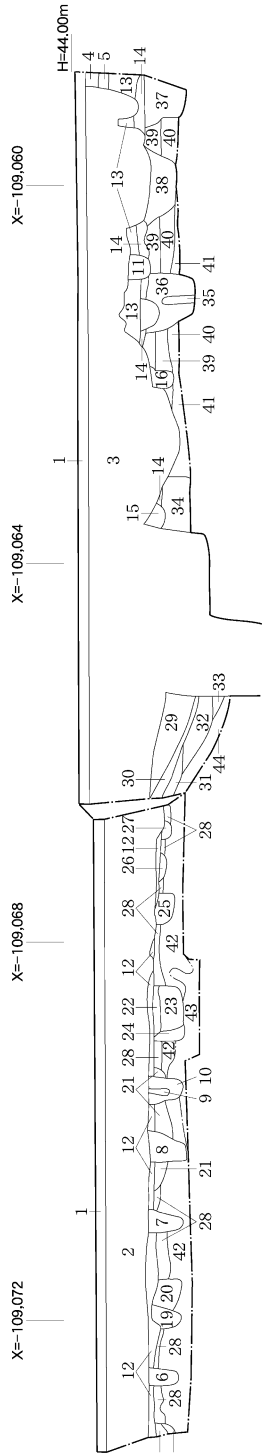
基盤層上面で検出した遺構で、調査区北西隅に竪穴住居が1戸ある。他の区域では、基盤層まで削平を受けており、当該期の遺構は未検出である。

竪穴 200 (図7、図版2) 調査区北西隅で検出した竪穴住居である。西半は調査区外へ広がり、

表2 遺構概要表

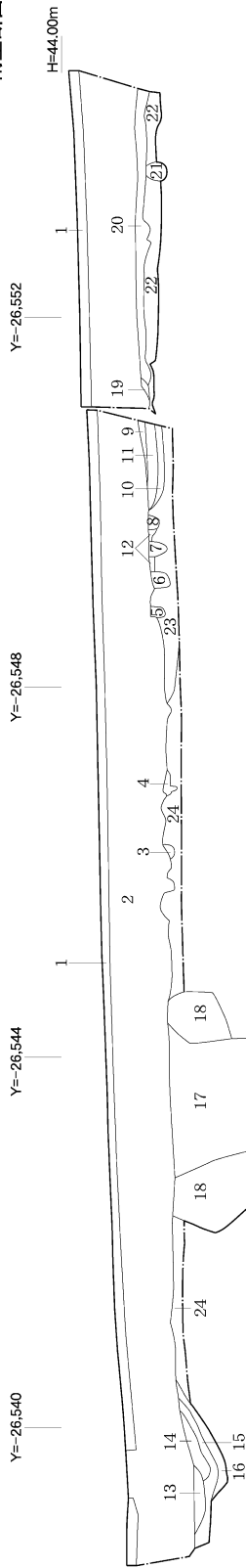
時 代	遺 構	備 考
飛鳥時代	竪穴住居	第2面
平安時代	掘立柱建物、井戸、土坑、柱穴群	第1面
鎌倉時代～室町時代	溝、柱穴群	第1面

西壁断面



- | | | | | | | | |
|----|-----------------------|------------------------|--------------------------|--------------------|---------------------------|-----------------------------|----------------------------|
| 1 | アスファルト | 12 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、φ1~2cm礫・炭含 | 23 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ1~2cm礫含 | 34 | 10YR4/2 黒褐色砂泥、φ1~2cm礫・炭少量含 |
| 2 | 砕石・既設管襷乱 | 13 | 10YR3/2 黒褐色砂泥、炭・焼土少量含 | 24 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、炭少量含 | 35 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 (柱当たり) |
| 3 | 4 | 10YR3/3 灰黄褐色砂泥、炭・焼土少量含 | 25 | 10YR3/2 黒褐色砂泥、炭少量含 | 36 | 10YR3/2 明黄褐色砂泥、炭・焼土少量・ブロック含 | |
| 4 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 (近代耕作土) | 15 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 26 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 | 37 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭・焼土少量含 |
| 5 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 (近代耕作土) | 16 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、炭少量含 | 27 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、炭少量含 | 38 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭少量含 |
| 6 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭・焼土含 | 17 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、粘質、炭含 | 28 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、炭少量含 | 39 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、炭・焼土少量含 |
| 7 | 10YR3/2 黒褐色砂泥、炭少量含 | 18 | 10YR4/2 黒褐色砂泥、φ1~2cm礫・炭含 | 29 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭・焼土少量含 | 40 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、炭少量含 |
| 8 | 10YR3/2 暗褐色砂泥、炭少量含 | 19 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 30 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 41 | 10YR6/6 明黄褐色シルト |
| 9 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 (近代耕作土) | 20 | 10YR3/2 黒褐色砂泥、炭少量含 | 31 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ1~4cm礫少量含 | 42 | 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト、ブロック含 |
| 10 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 21 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 32 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ1~4cm礫少量含 | 43 | 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト、φ1~3cm礫含 |
| 11 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 22 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、焼土少量含 | 33 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 44 | 10YR6/6 明黄褐色砂泥、φ1~5cm礫多量含 |

南壁断面



- | | | | | | |
|----|---------------------------|----|--------------------------------|----|---------------------------------|
| 1 | アスファルト | 11 | 10YR4/2 黒褐色砂泥、φ1~2cm礫・炭含 | 21 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、炭・焼土含 |
| 2 | 砕石・既設管襷乱 | 12 | 10YR3/2 暗褐色砂泥、炭少量含 | 22 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ1~4cm礫少量含 (溝10) |
| 3 | 10YR3/3 灰黄褐色砂泥、炭少量含 | 13 | 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト、炭少量含 | 23 | 10YR5/6 黄褐色シルト (基盤層) |
| 4 | 10YR3/4 暗褐色砂泥、φ1~4cm炭少量含 | 14 | 10YR5/2 灰黄褐色粘土、φ1~2cm礫・炭・焼土少量含 | 24 | 10YR5/6 黄褐色シルト (基盤層) |
| 5 | 10YR3/4 暗褐色砂泥、炭・焼土少量含 | 15 | 10YR5/1 褐灰色粘土、φ1~2cm礫・炭少量含 | | |
| 6 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭・焼土少量含 | 16 | 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト、炭少量含 | | |
| 7 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭・焼土少量含 | 17 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、炭・焼土少量含 | | |
| 8 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、黄褐色シルトブロック含 | 18 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、黄褐色シルトブロック含 | | |
| 9 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、粘質、炭含 | 19 | 10YR4/2 黒褐色砂泥、φ1~2cm礫・炭含 | | |
| 10 | 10YR4/2 黒褐色砂泥、φ1~2cm礫・炭含 | 20 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | | |

図5 豊洲区豊洲・西壁断面図 (1:80)



図6 調査区平面図 (1 : 100)

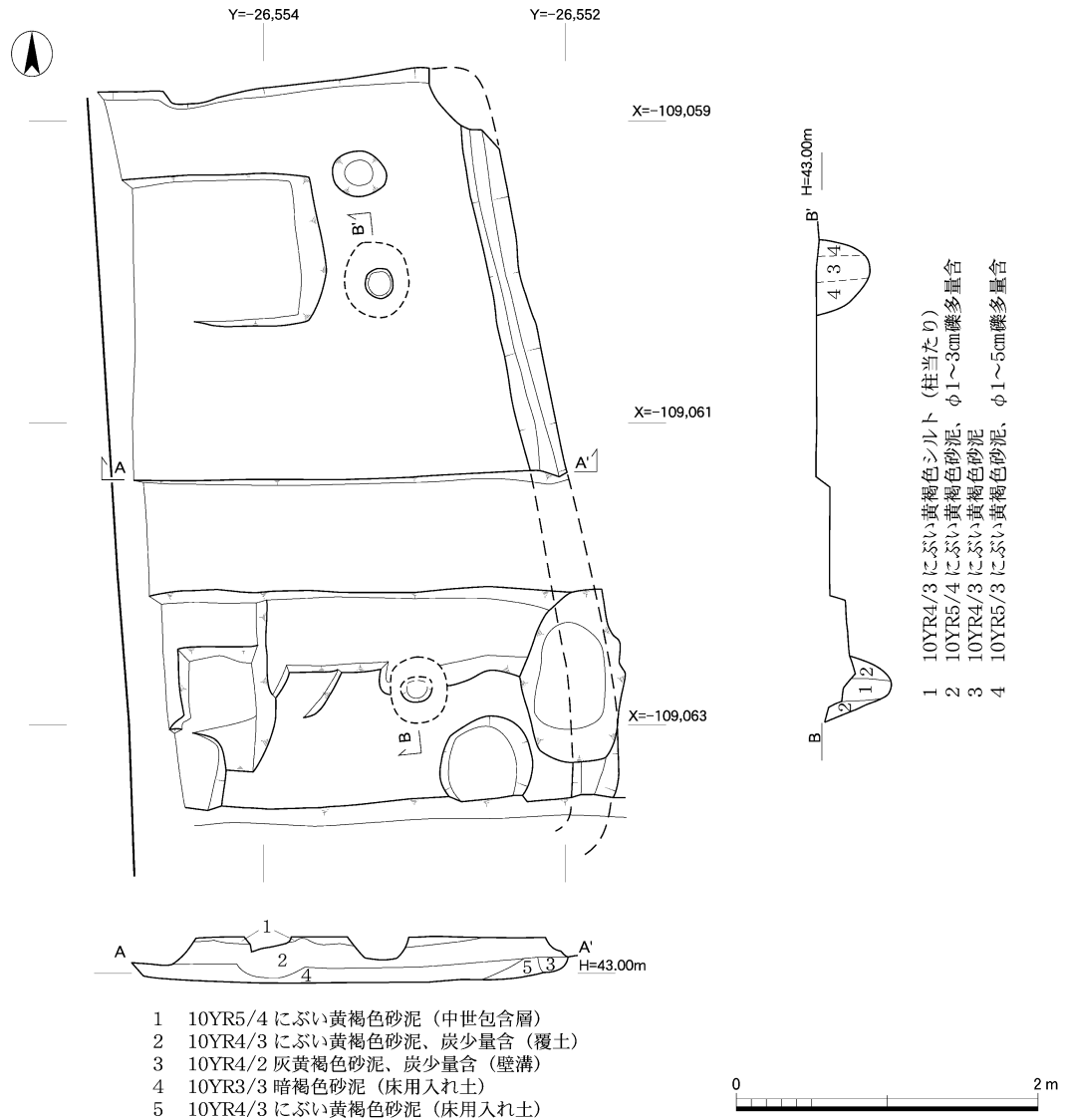


図7 竪穴 200 実測図 (1 : 50)

南辺ならびに東辺の一部は攪乱によって削平を受ける。また、中央から南側は、上面も後世の遺構により削平を受けている。平面形は方形を呈し、東辺を基にした竪穴の主軸方向は、座標北に対して約9°西に振れる。検出面での現存規模は、東西約2.8m、南北約5.0m、検出面から0.3～0.35mで掘形の底面に至る。底面中央部には焼土や炭が遺存する箇所がある。底面から約0.1mの厚さで床用の入れ土を施し、上面を床面とする。壁溝は東辺に沿って検出した。幅約0.2m、深さ約0.1mある。支柱穴は2基検出した。掘形は円形を呈し、径0.45～0.5m、深さ約0.35～0.45mある。柱当りは南側の支柱穴で明瞭に遺存しており、径は0.15mある。南東隅部で土坑208を検出した。南端は攪乱を受ける。東西長約0.6m、深さ約0.2mあり、貯蔵穴と考えられるが、他の時代の遺構の可能性もある。土師器の細片と須恵器(図12-1・2)が出土している。この他、覆土などから土師器では近江型の長胴甕と考えられる細片が出土しており、周辺の竪穴住居検出例からも7世紀代の遺構であろうと考えられる。

(3) 第1面の遺構

下記の遺構のいくつかは、遺物包含層や整地土層上面で検出できたことを断面観察から確認したが、実際には検出することに困難を伴ったことから、当該土層を除去し、基盤層上面で検出した。検出した遺構には、建物・柵・井戸・溝・柱穴群などがある。

建物1(図8、図版3) 調査区中央南部で検出した掘立柱建物である。南側は調査区外へ広がり、南北棟建物の北側妻部分の柱筋を検出したと考えている。柱穴は3基検出しており、東側の2基は井戸1の掘形上面で検出した。主軸方向は座標北に対し5°西に振れる。柱穴の平面形は歪な方形を呈する。検出面での規模は、一辺約0.4～0.7m、深さ0.2～0.4mある。柱間は約1.8mある。建物1の柱穴からは土師器・須恵器などが出土したが、細片であり詳細は不明である。しかし、柱穴の規模や柱間から平安時代の建物と考えている。

建物2(図8、図版3) 調査区中央、建物1の北側で検出した掘立柱建物である。建物1と柱筋を揃える。北側は攪乱によって削平を受ける。柱穴は4基検出しており、南北棟建物の南部を検出したと考えている。主軸方向は座標北に対し5°西に振れる。柱穴の平面形は歪な方形を呈する。検出面での規模は、一辺約0.5～0.8m、深さ0.2～0.4mある。柱間は桁行が約2.1m、梁行が約1.8mある。建物2の柱穴からは土師器・須恵器などが出土したが、細片であり詳細は不明である。しかし、柱穴の規模や柱間から平安時代の建物と考えている。

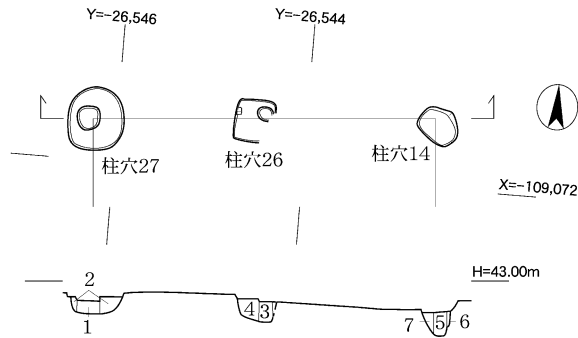
建物3(図8) 調査区南西部で検出した南北棟と考えられる掘立柱建物である。建物の西・南部は調査区外に広がる。主軸方向は北に対して5°西に振れる。柱穴の平面形は歪な方形を呈し、検出面での規模は、一辺約0.5～0.6m、深さ0.07～0.15mある。柱間は桁行が約2.4m、梁行が約2.1mある。建物3の柱穴からは土師器・須恵器などが出土したが、細片であり詳細は不明である。しかし、柱穴の規模や柱間から平安時代の建物と考えている。

建物4(図9) 調査区北西隅、竪穴200の上面で検出した掘立柱建物と考えられる柱筋で、柱穴は3基検出した。建物の西側の大半は調査区外に広がる。柱筋の北側延長は調査区外に、南側延長は攪乱によって削平を受けており、建物の柱筋方向や規模などは不明である。主軸方向は北に対して5°西に振れる。柱穴の平面形は方形を呈し、検出面での規模は、一辺約0.6～0.8m、深さ0.3～0.5mあり、建物に復元した柱穴の中では最も大規模な柱穴である。柱間は約2.3mある。建物4の柱穴からは土師器・須恵器などが出土したが、細片であり詳細は不明である。しかし、柱穴の規模や柱間から平安時代の建物と考えている。

柵1(図9、図版3) 後述する溝5の西肩口に沿って検出した柵と考えられる南北方向を示す柱列である。主軸方向は西に対して約5°南に振れる。柱間は約2.0mある。各柱穴は平面形が歪な方形を呈し、検出面での規模は、一辺約0.3～0.6m、深さ0.1m前後ある。近接してほぼ同規模の柱穴があり、建て替えた可能性がある。柵1からは土師器・須恵器などが出土した。細片で詳細は不明であるが、柱穴の規模や柱間から平安時代と考えられる。

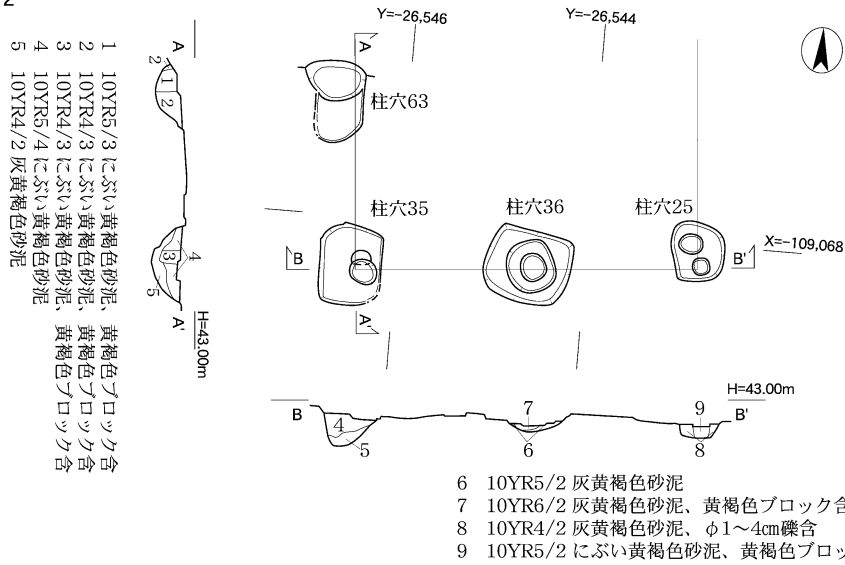
柵2(図9、図版3) 後述する溝10の南肩口に沿って検出した柵と考えられる東西方向を示

建物 1



- | | |
|------------------------------|---------------------------|
| 1 10YR3/2 黒褐色砂泥、炭少量含 | 5 10YR3/2 黒褐色砂泥、炭少量含 |
| 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、褐色ブロック・炭含 | 6 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、炭少量含 |
| 3 10YR3/2 黒褐色砂泥、炭・焼土少量含 | 7 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、炭褐色ブロック含 |
| 4 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥、褐色ブロック・炭含 | |

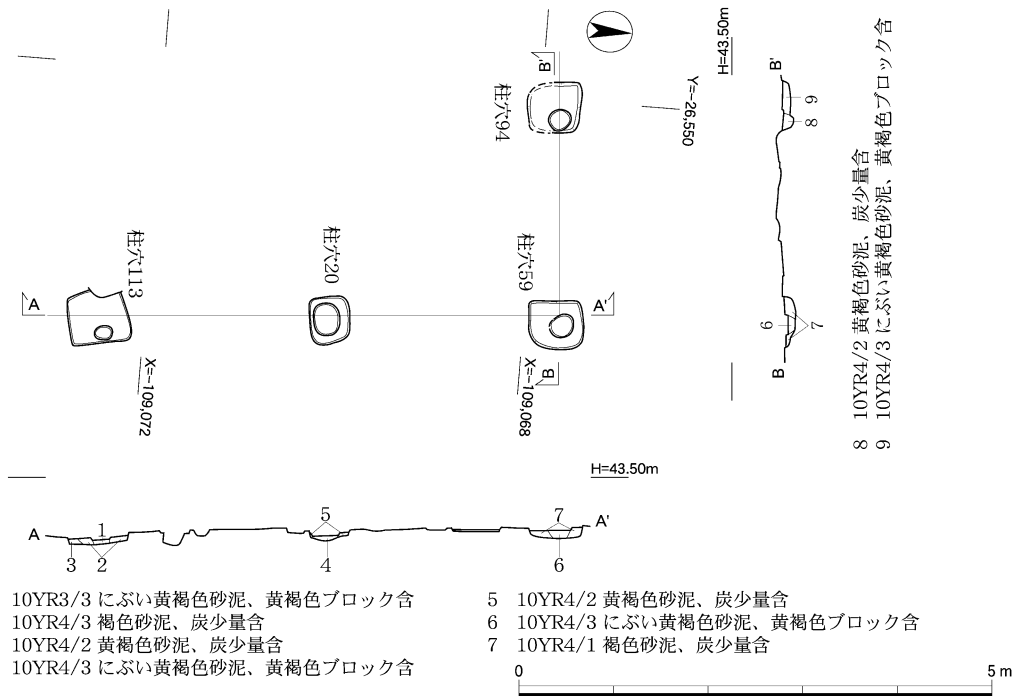
建物 2



- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥、黄褐色ブロック含
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、黄褐色ブロック含
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、黄褐色ブロック含
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥
- 5 10YR4/2 灰黄褐色砂泥

- 6 10YR5/2 灰黄褐色砂泥
- 7 10YR6/2 灰黄褐色砂泥、黄褐色ブロック含
- 8 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ1~4cm礫含
- 9 10YR5/2 にぶい黄褐色砂泥、黄褐色ブロック含

建物 3



- 1 10YR3/3 にぶい黄褐色砂泥、黄褐色ブロック含
- 2 10YR4/3 褐色砂泥、炭少量含
- 3 10YR4/2 黄褐色砂泥、炭少量含
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、黄褐色ブロック含

- 5 10YR4/2 黄褐色砂泥、炭少量含
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、黄褐色ブロック含
- 7 10YR4/1 褐色砂泥、炭少量含

- 8 10YR4/2 黄褐色砂泥、炭少量含
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、黄褐色ブロック含

図8 建物1~3実測図 (1:80)

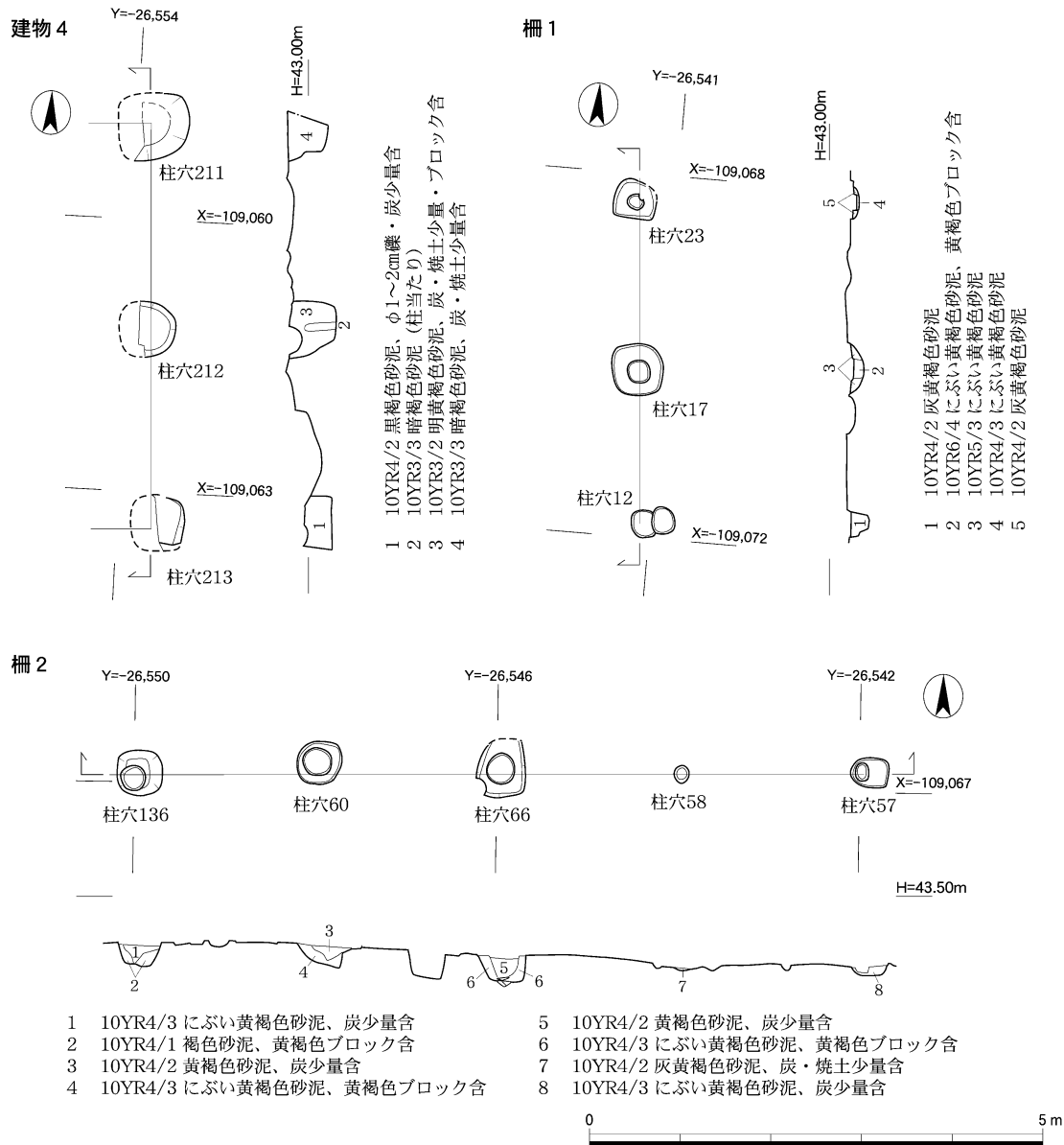


図9 建物4、柵1・2実測図 (1:80)

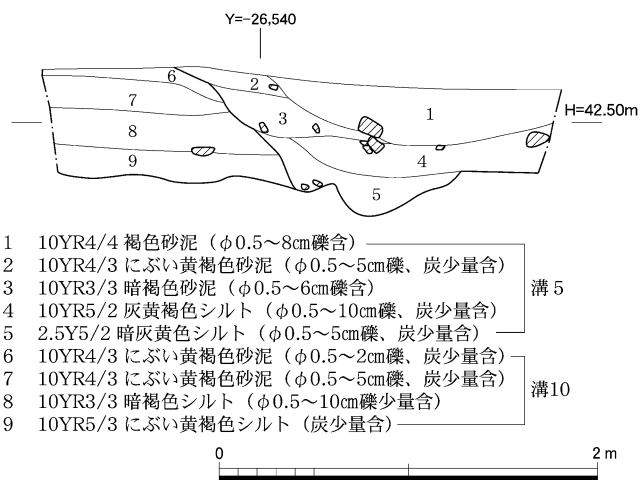


図10 溝5・10断面図 (1:40)

す柱列である。主軸方向は西に対して約1°南に振れる。柱間は約2.0 mある。各柱穴は平面形が歪な方形を呈し、検出面での規模は、一辺約0.3~0.6 m、深さ0.13~0.36 mある。柱穴66の底面には長径0.2 m前後の複数の礫を据え根石とする。柵2からは土師器・須恵器などが出土した。細片で詳細は不明であるが、柱穴の規模や柱間から平安時代と考えられる。

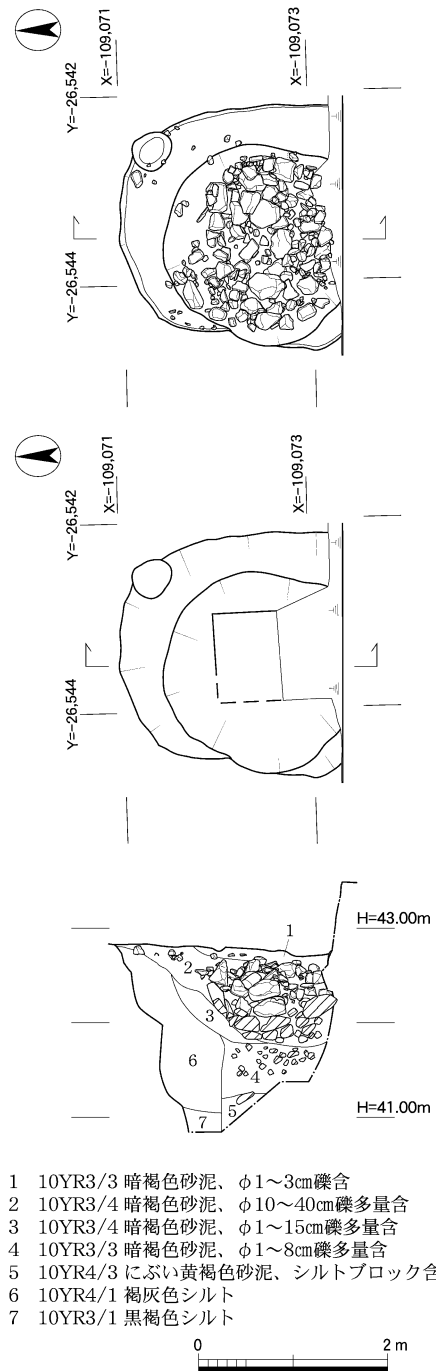
小柱穴 この他、数十基の小規模な柱穴を検出している。平面形は円形を呈し、検出面での規模は、径0.1～0.2 m、深さ0.1～0.2 mある。中には底面に根石を据えるものもあるが、調査面積が狭小なこともあり、柱筋を確認することはできなかった。出土遺物から中世と考えられる。

井戸1 (図11、図版2) 井戸1は調査区南端で検出した遺構である。掘形の平面形はやや歪な円形を呈し、南肩口は調査区外へ広がる。検出面での規模は、東西約2.5 m、南北約2.2 mある。深さは約1.8 mまで調査し、下面からボーリング棒で探査したが、約1.0 mでも底面は未確認である。掘形の中央部に検出面から約0.9 mまで長径0.1～0.4 mの礫を挿鉢状に密に詰め込む。礫を除去した面で、一辺1.1 mの方形の掘形を検出しており、木製井戸側の痕跡と考えている。遺物は12世紀前後の土器・瓦類が出土した。

溝5 (図10、図版1) 調査区東端で検出した溝で、南北方向に長さ約14 mにわたり検出した。東肩口は調査区外に広がる。底面は西肩口に沿ってさらに一段窪み、溝状を呈する。検出面での規模は、幅1.8 m、深さ0.6～0.8 mある。底面は北側へ下がり、約0.15 mの比高差がある。埋土は、上層には礫を含む砂泥層が、下層にはシルト層が堆積している。

溝10 (図10、図版1) 調査区北半で検出した溝で、東西方向に長さ約16 mにわたり検出した。北肩口は東西方向の現代の排水溝により、東側は溝5により削平を受ける。検出面での規模は、幅1.26 m、深さ0.7～1.1 mある。底面は東側へ下がり、溝5西肩口から約2 m西側までは約0.1 mの比高差があるが、以東では傾斜が強まり、約0.4 mの比高差がある。

溝5・10とも出土遺物から中世に埋没したと考えている。



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥、φ1～3cm礫含
- 2 10YR3/4 暗褐色砂泥、φ10～40cm礫多量含
- 3 10YR3/4 暗褐色砂泥、φ1～15cm礫多量含
- 4 10YR3/3 暗褐色砂泥、φ1～8cm礫多量含
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、シルトブロック含
- 6 10YR4/1 褐灰色シルト
- 7 10YR3/1 黒褐色シルト

図11 井戸1実測図(1:80)

4. 遺物

(1) 遺物の概要

遺物は、遺物整理箱で9箱出土した。遺物内容としては、土器類が多数を占め、瓦類は1箱にとどまる。遺物は各遺構から出土したが、大半は細片であり、後述する井戸1出土遺物以外は図示できるものは少ない。

飛鳥時代から奈良時代の遺物は、竪穴住居200や遺物包含層などから出土した。土師器、須恵器、平瓦などがあり、7～8世紀前半に属すると考えられる。

平安時代の遺物は、井戸1、柱穴などの遺構のほか、遺物包含層や後世の遺構から出土した。土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、鉄製品などがある。9～12世紀に属すると考えられる。

鎌倉時代から室町時代の遺物は、溝・遺物包含層などから出土した。土師器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。13～15世紀に属すると考えられる。

(2) 土器類

土坑208出土土器(図12)土師器・須恵器がある。土師器は細片のため図示していない。

須恵器には(1・2)がある。1は杯Aである。底部は平坦で体部は立ち上がりつつ外傾し、端部は丸くおさめる。底部外面はヘラ起こし、体部はヨコナデを行う。口径13.8cm、器高3.5cm。2は杯Bである。底部は平坦で体部は立ち上がりつつ外傾し、端部は丸くおさめる。底部外面には底部界からやや内側に高台を貼り付ける。口径12.6cm、器高3.7cm。

井戸1出土土器(図12、図版4)土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器などがある。緑釉陶器・灰釉陶器は混入遺物である。

土師器には、形態から皿A(3～9)・皿Ac(10)・皿N(11～22)がある。3～6は、平

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
飛鳥時代 ～奈良時代	土師器、須恵器、瓦		須恵器2点		
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、 緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、 輸入陶磁器、瓦		土師器20点、須恵器1点、灰釉 陶器2点、瓦器1点、輸入白磁 3点、輸入青磁3点、軒丸瓦1 点、鬼瓦1点		
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、 施釉陶器、輸入陶磁器、瓦				
合計		10箱	34点(1箱)	0箱	9箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

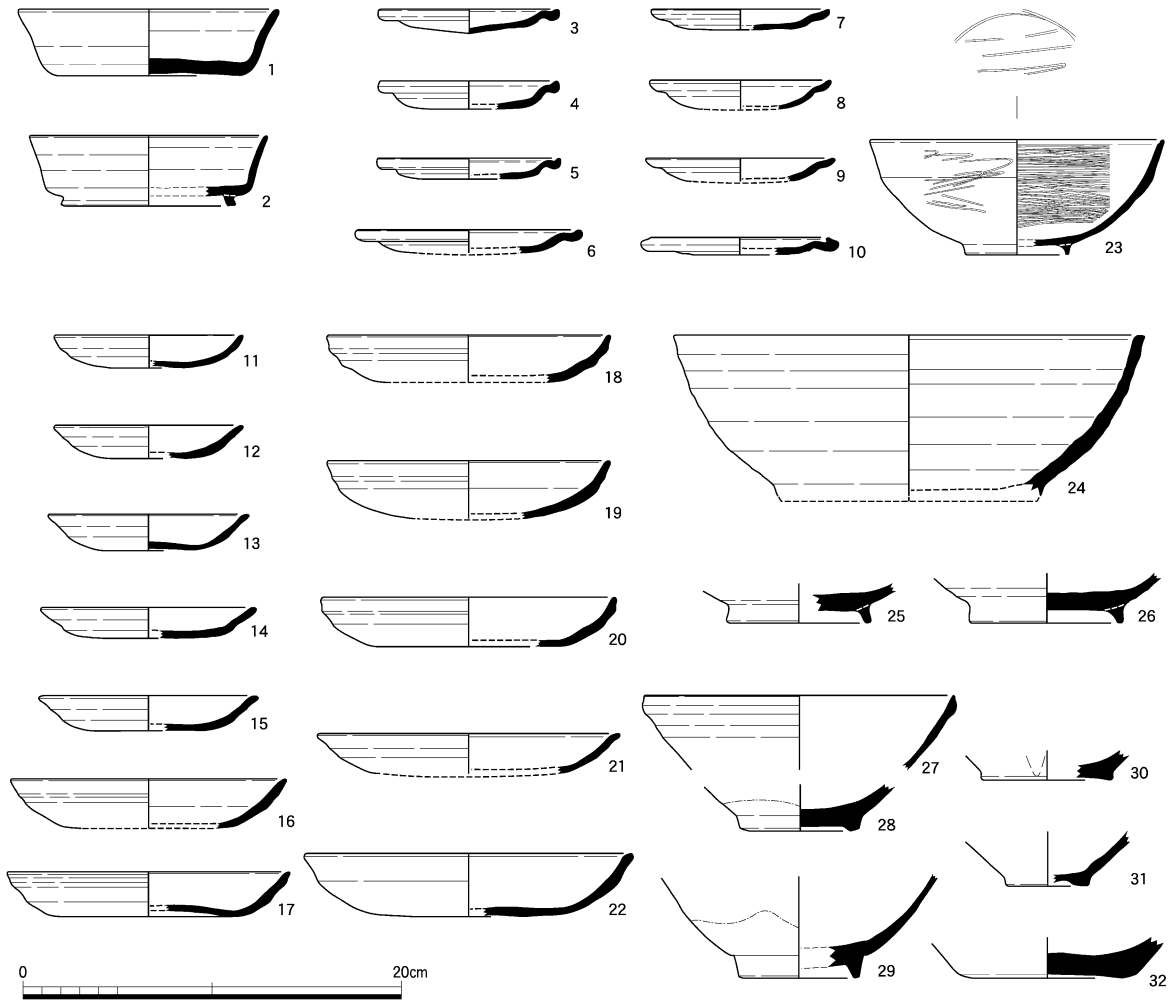


図12 土坑208・井戸1出土土器実測図(1:4)

坦な底部から短く屈曲した口縁部が付く。端部は上方に丸くおさめる。口径9.6～10.0 cm、器高1.1～1.3 cm。7～9は、形態は3～6と同様であるが、口縁部の屈曲は緩く、端部は外上方に開く。口径9.4～10.0 cm、器高1.1～1.6 cm。10は、口縁部を強く内側に折り込み端部は丸くおさめる。口径10.4 cm、器高0.9 cm。11～22は、口径から2種に大別できる。11～15は、小型の皿である。平たい底面から口縁部が開き、口縁部外面は2段ナデを行うものがある。口径10.0～11.6 cm、器高1.7～1.9 cm。16～22は、大型の皿である。口縁部には18・20とその他の2形態がある。18・20は口縁端部を強くナデ、上方に立ち上げる。その他は、2段ナデを行い、端部はやや外反し丸くおさめる。口径14.6～17.4 cm、器高2.4～3.4 cm。(23)は瓦器椀である。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部はわずかに外傾し、端部は丸くおさめる。口縁端部内面には1条の沈線が巡る。体部から口縁部には、内面では密に、外面では粗いヘラミガキを施す。また、底部内面には長楕円形の連続した暗文を施す。口径15.6 cm、器高6.1 cm。楠葉系の瓦器椀である。(24)は須恵器鉢である。体部は内湾しつつ立ち上がり、口縁端部は外上方に開く。体部内外面にはヨコナデ痕跡がやや強く残る。口径25.0 cm。(25・26)は灰釉陶器椀で、いわゆる山茶椀である。体部上半は欠損する。体部下半と底部内面はヨコナデを行う。底部外面は糸切りを行い、端

部が丸みを帯びる高台を貼り付ける。25は底径7.6cm。26は底径8.2cm。(27～29)は、輸入陶磁器の白磁碗である。27は体部から口縁部の破片である。口縁端部外面は下方に向かって肥厚する。全釉を施す。口径16.4cm。28・29は底部から体部下半にかけての破片である。28は断面台形の低い高台を削り出す。体部下半まで釉薬を掛ける。29は体部がやや内湾気味に立ち上がり、断面台形のやや高い高台を削り出す。体部下半まで釉薬を掛ける。底径は28・29とも6.4cm。(30～32)は、輸入陶磁器の青磁碗である。30は体部下半から底部の破片である。底部は平高台を削り出す。体部外面にはタテ方向に輪花を表す凹圧痕がある。内外面に全釉を施す。底径7.0cm。31は体部下半から底部の破片である。底部は短い輪高台を削り出す。内外面に全釉を施す。底径

4.4cm。32は体部下半から底部の破片である。底部は平高台を削り出す。内外面に全釉を施す。底径9.4cm。

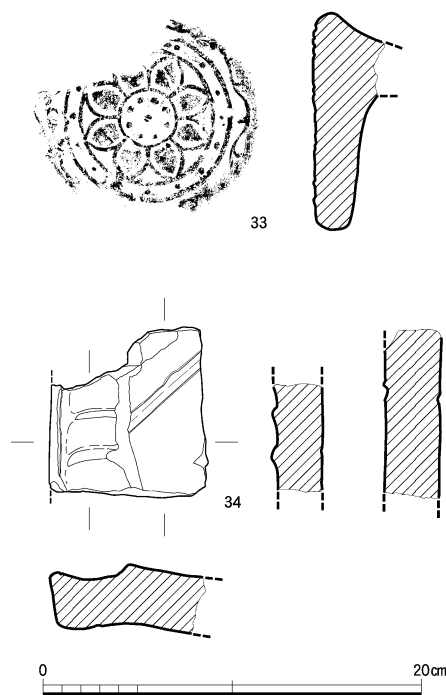


図13 井戸1出土瓦拓影・実測図(1:4)

(3) 瓦類(図13・14)

(33)は、単弁8葉蓮華文軒丸瓦である。丸瓦部の大半は欠損する。丸瓦部から瓦当面向かって強いタテ方向のナデ、瓦当裏面および周縁はナデを行う。中房には蓮子を配するが不明瞭である。花卉は短い。圏線は2重に巡らし中に珠文を密に配する。圏線外には唐草文を巡らす。焼成は良好で、胎土は青灰色を呈する。森ヶ東瓦窯産と考えられる。

(34)は、鬼瓦の下半部と考えられる破片である。側面ならびに裏面はナデを行い成形する。瓦当面向してナデにより鱗状の凹凸を作り出し文様とする。焼成は良好で、胎土は青灰色を呈する。



図14 井戸1出土瓦

5. ま と め

今回の調査では、飛鳥時代から中世に至る多くの遺構を検出することができた。以下、調査成果についての概要を示す。

まず、今回の調査地点で飛鳥時代に属する竪穴住居を検出したことにより、常盤仲之町遺跡における古墳時代後期から飛鳥時代の居住域の広がりがさらに南東部に広がることを示したことは、調査成果の一つである。

平安時代と考えられる遺構には、建物4棟、柵2条、井戸1基などがある。

井戸遺構は当該地周辺における調査でも検出例は極めて少なく、検出例として重要である。井戸1は深さ3m以上に達する。この事例から、当該地では地下水の湧水高は地表面から比較的深いことが窺われる。

建物の方位は、いずれも座標北に対し5°前後西に振れる傾向を示すという共通性がある。建物1・2は柱筋が通ることから、同時期の建物と想定できる。建物3は建物1・2とは柱筋が通らず、柱間も異なることから、建物1・2とは時期差があると考えられる。建物配置や構造から想定すると、建物3と井戸1が配置された時期と、建物1・2が配置された時期の2時期が想定でき、当該地が2時期にわたり居住域として活用されていたことが明らかになった。建物3と井戸1が配置された時期は、井戸1出土遺物から12世紀前後と考えている。建物1・2の時期は、建物3・井戸1廃絶後の12世紀代であろうと考えている。

溝5・10は幅2m以上ある大規模なものである。溝5は南北方向を示し、北延長には2008年度調査(図4-27)の落込29がある。落込29と溝5が連続する遺構である想定すると、南北延長約90mにわたり検出したことになる。この大規模な溝幅と延長距離を考慮すると、広隆寺寺域を画する施設に付属する溝ないし現城北街道の前身の古道に付属する溝の可能性が高い。2008年度調査の落込29は、座標北に対し5°前後西に振れる。今回検出した溝5はほぼ座標北を示す。この座標北に対する振れの違いは、現城北街道の湾曲の状況と比較的一致する。

この溝5は、出土遺物から室町時代までには埋没(存在)したことは明らかである。したがって、敷設時期は、さらに遡る可能性が高い。このような大規模な溝を敷設する契機を想定すれば、広隆寺寺域に関連する施設、あるいは条里に関連する区画溝であることの蓋然性が高い。いずれにせよ、溝5・10については、当該地域の歴史的環境を考えるうえで極めて重要な遺構であり、当該地域における遺跡復元を考えるうえでも基点となる可能性を示す遺構といえ、今回の調査成果の中でも重要な発見と言えよう。

なお、溝5・10の検出地点と現存の施設や平安京からの図上に置ける直線距離を示しておく、溝5は西京極大路西築地芯から西へ約800mに、溝10は現在の太秦広隆寺南門中心から北へ約312mの地点に位置する。

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	ときわなかのちょういせき							
書名	常盤仲之町遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2009-18							
編著者名	辻 裕司・東 洋一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年4月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ときわなかのちょういせき 常盤仲之町遺跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 うずまさひがしほちおかちょう 太秦東蜂岡町 ちない 地内	26100	908	35度 01分 00秒	135度 42分 33秒	2009年12月 14日～2010 年2月2日	210m ²	道路拡幅 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
常盤仲之町遺跡	集落跡 ・墓跡	飛鳥時代 ～奈良時代	竪穴住居	土師器、須恵器、瓦		飛鳥時代の竪穴住居を遺跡内の最も南で検出した。 鎌倉～室町時代の 広隆寺寺域に関連する溝を検出した。		
		平安時代	掘立柱建物、井戸、土坑、柱穴群	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、瓦				
		鎌倉時代 ～室町時代	溝、柱穴群	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-18

常盤仲之町遺跡

発行日 2010年4月15日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961